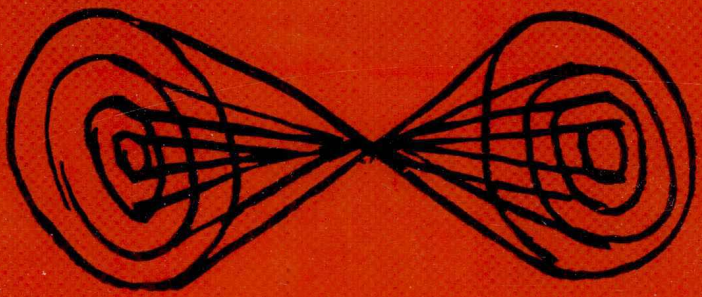

ロマン・ロラン ★★

ジャン・クリストフ II
ベートーヴェンの生涯

世界文學大系

48

筑摩書房版

世界文学大系 48

ロマン・ロラン ★★

昭和33年5月10日発行

定価450円

訳者　豐島與志雄
　　平岡昇

発行者　古田晁

印刷者　山元正宜

発行所　株式会社 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 165768　電話(29)局7651

本　文　紙　　三菱製紙株式会社
ク　ロ　ス　　東洋クロス株式会社
本文整版印刷　　三晃印刷株式会社
製　　本　　美行製本有限会社

目次

ジャン・クリストフ　豐島與志雄訳　5

第七巻　家の中

第八巻　女友だち

第九巻　燃ゆる荆

第十巻　新しき日

ベートーヴェンの生涯　平岡昇訳　365

付・ベートーヴェン文集

ジャン・クリストフについて　アラン　斎藤正直訳　清水徹訳　402

解説　中村真一郎　408

年譜　414

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

裝幀　庫田　發

ロマン・ロラン★★

Genève, le 23 mai 1945

Mon jeune ami lointain, je vous remercie de votre sympathie. Je suis heureux que vous ayez reconnu en Christophe un frère.

Vous avez raison : la source de tout art, c'est la vie, — la vie mystérieuse et profonde, que pénètre et illumine l'esprit. Mais la plupart des artistes (des faux artistes) d'aujourd'hui s'arrêtent à la porte de la vie, et l'art leur est un jouet. La crise mondiale que nous traversons met en lumière leur inutilité. Cette épreuve pèse les âmes. Il y en a bien peu qui aient résisté au délire de la haine ; parmi l'élite européenne l'époque est ~~[illegible]~~ par l'héroïsme des peuples, mais elle manque de chefs spirituels ; elle fait l'effet d'un torse gigantesque, sans tête.

Continuez, cher Saichi Naruse, d'apprendre à lire au cœur des langues et de pensée européennes. Mais soyez impregné de tout ce qu'il y a de grand dans la pensée d'Asie. Nous devons travailler maintenant à mettre en commun les richesses des deux mondes. L'Europe a autant besoin de l'Asie que l'Asie de l'Europe, — plus encore, la certitude. Il faut que ces deux fleuves immenses finissent par unir leurs eaux.

Je travaille, cette année, à Genève, où je m'occupe à l'Agence internationale des prisonniers de guerre. J'espère que, l'an prochain, nous nous verrons à Paris. Mon adresse fixe est : 3 rue Boissonade (XIVe).

Bon courage, soyez heureux de vivre à une époque tragique, où l'humanité [illegible] ~~[illegible]~~ et où abondent les grandes tâches.

Je vous serre cordialement la main.

Votre dévoué

Romain Rolland

Hôtel Beau-rivage - Champel, Genève (Suisse)

Je n'ai pas de photographie sous la main. Vous en trouverez une, pas très bonne, reproduite page 1, dans la trad. de Gilbert Cousin.

ジャン・クリストフ

第七巻　家の中

序

ジャン・クリストフの友人らへ

私は数年来、既知あるいは未知の離れてる友人らと、いつも心のうちで話をしてきたが、今日では声高に話す必要を感ずる。それにまた、彼らに負うところを感謝しなければ、私は忘恩者となるかも知れない。ジャン・クリストフのこの長い物語を書き始めてより、私は彼らとともに、彼らのために、書いてきたのである。彼らは私を励まし、忍耐して私の後についてき、その同情で私を元気づけてくれた。もし私が、彼らに多少の善をなしえたとしても、彼らはさらに多くの善を私になしてくれた。私のこの作品は、われわれの思想を結合した果実である。

私はこの作品に着手した時、少数の友をしか期待しえなかった。私の望みはソクラテスの家の程度に止まっていた。しかし年を経るにしたがって私はますます、同じものを愛し同じものを苦しむことにおいて、パリと地方とを問わず、フランスとフランス以外とを問わず、いかに多くの同胞があるかを感じた。広場の市にたいする軽蔑を語ることによって、クリストフが自分の本心を――並びに私の本心を――吐露するところの、この前の一巻が出たおりに、私はその証拠を得たのであった。私のいかなる著書も、これほど直接の反響を呼び起したものはなかった。実際のところ、それはただに私の声だったばかりではなく、また私の友人らの声だったからである。クリストフは私のものであると同様にまた彼らのものであることを、彼らはよく知っている。われわれはクリストフのうちに、われわれに共通な魂を多分に投げ込んでおいたのである。

クリストフは彼らのものであるが故に、私は今日提供するこの一巻について多少の説明を読者にしておかなければならない。広場の市におけると同じく、この一巻のうちにも彼らは小説的波瀾を見出さないだろうし、あたかもここで主人公の生活は中止されたかの観がある。

私はここに、いかなる情況のうちに私がこの全部の著作に取りかかったかを、陳述しなければならない。

私は孤立していた。フランスにおける多くの人々と同様に、私は害悪な精神界に窒息しかけていた。私は呼吸したかった。不健全な文明にたいして、偽りの選良者らから腐敗されてる思想にたいして、反抗して起ちたかった。その選良者らに言ってやりたかった、「君らは嘘を言ってる、君らはフランスを代表してはいない」

それには、純潔な眼と心とを持ち、発言の権利を得るだけの十分高い魂を持ち、人に耳を傾けしむるにたりる十分強い声を持ってる、一の主人公が、私に必要であった。私は気長にそういう主人公を築き上げた。意を決してこの著述に筆を染むる前、私は主人公を十年間も自分のうちに担っていた。クリストフがいよいよ発足したのは、私がすでに最後まで彼の道程を見きわめた時にであった。そして、広場の市のある部分や、ジャン・クリストフの終りのある部分、(ことに燃ゆる荆の中のアンナの章)などは、曙よりも前に、あるいは同時に、書かれていた。クリストフやオリヴィエのうちに反映するフランスの映像は、最初よりして、本書のうちに一定の場所を占めていた。それゆえに、これをもって著作の脱線だとみなしてはいけない。これは道中予定の佇立であって、過ぎ来し谷間をふり返り見、行く手の遠い地平線をうち眺むべき、人生の大なるテラースの一つである。

いうまでもなく私は、これら最近の巻(広場の市と家の中)において、もとよりその後の部分においても同様であるが、一の小説を書くという志望は少しもなかった。それではこの作品はいったいなんであるか？　詩であるのか？――いや名前の必要がどこにあろう。一人の人間

を見て、それは小説か詩かとたずねる者が世にあろうか。私が創造したのは一個の人間である。一個の人間の生活は、文学上のある形式の中にはめこまれうるものではない。その法則は生活自身のうちにある。そして各生活はそれぞれ自己の法則をそなえている。その掟は自然の力の掟と同じである。人間の生活には、静かな湖水のごときもあり、雲の流るる明るい大空のごときもあり、豊饒な平野のごときもあり、切り立った山嶺のごときもある。ジャン・クリストフは、いつも大河のごとくに私の眼には映った。私は最初よりそれを述べておいた。——大河の流れのうちには、周囲の野や空を映しながら広広として眠ってるように思える場所がある。それでもやはり流れ変化しつづけている。時としては、静まり返った外見のうちに急流を包んでいて、その猛然たる勢いはやがて、先に行って第一の障害にぶつかった時、とつぜん現われてくることがある。そういうのが、ジャン・クリストフのこの一巻の姿である。今は、おもむろに水を集め、両岸の思想を吸い込みながら、ふたたびその流れをつづけんとしている、海の方へ——われわれがみな行くべき海の方へ。

一九〇九年一月　　ロマン・ロラン

一

おれには一人の友がある！……苦しい時に寄りすがるべき一つの魂を、喘ぐ胸の動悸が静まるのを待ちながら、やっと息がつけるやさしい安全な一つの避難所を、見出したという楽しさ！　もはや一人ではない。疲れて敵に渡されるまで、常に眼を見開き不眠のために充血させながら、絶えず武装していることも、もはや必要ではない。自分の全身を向うの手中に託し、向うでもその全身をこちらの手中に託した、親愛なる伴侶があるのだ。ついに休息を味わい、彼が見張ってくれてる間は眠り、彼が眠ってる間は見張ってやる。子供のようにこちらを信頼してるなつかしい者を、保護してやるという喜びを知る。向うに身をうち任せ、あらゆる秘密をも知られてるのを感じ、勝手に自分を引き廻されるのを感ずるという、さらに大きな喜びを知る。多年の生活のために老い衰え疲れていたのが、友の身体のうちに若々しく激刺と生れ返り、新しい世界を友の眼で眺め、この世のひと時の美しいものを友の官能で抱きしめ、生きることの輝かしさを友の心で楽しむ……苦しみを友とともにする……。ああ、友と一緒にいさえすれば、苦悶までが喜びである！

おれには一人の友がある！　自分の遠くに、自分の近くに、常に自分のうちに、友がある。おれは友を所有し、おれは友のものである。友はおれを愛している。友はおれを所有している。融け合って一つの魂となったわれわれの魂は、愛に所有されてるのだ。

*

ルーサン家の夜会の翌朝、クリストフが眼を覚ましながら第一に考えたのは、オリヴィエ・ジャンナンのことであった。彼はすぐに逢いたくてたまらなくなった。起き上って出かけた。八時前だった。なま暖かい多少重苦しい朝だった。早くも四月時分の気候が見舞ったようで、雷雨模様の雲がパリの上にたなびいていた。

サント・ジュヌヴィエーヴ丘の麓の、植物園の傍の小さな通りに、オリヴィエは住んでいた。その家は通りのいちばん狭い場所にあった。階段が薄暗い中庭の奥に開いていて、不潔な雑多な匂いを放っていた。急な曲り角をなしてる段段は、鉛筆で落書されてる壁の方へ傾いていた。四階まで上ると、灰色の髪を乱し平常着をだらしなくつけた女が、足音を聞いて扉を開いたが、クリストフの姿を見てまた荒々しく扉をしめた。どの階にもたくさん住居があって、立付の悪い扉の隙間から、子供らの押し合ったり泣き叫んだりするのが聞えていた。天井の低い各階の中にたがいにつみ重なり、胸悪くなるような中庭のまわりにぎっしりつまってる、不潔な凡俗な生活のうごめきだった。クリストフは嫌悪の情に打たれた。これらの人々は、少なくとも万人のための空気を持ってる田舎を離れて、いかなる渇望のためにここへ引きつけられてるのか、そして、生涯墓の中みたいな生活をしなければならないこのパリから、いかなる利益を得ることができてるのか、と彼は不思議に考えた。

彼はオリヴィエが住んでる階に達した。呼鈴の代りに結び綱がついていた。クリストフはそれをあまり強く引っ張ったので、その音にまた

幾つかの扉が階段口に半ば開かれた。オリヴィエが扉を開いた。その服装の質素ではあるが気をつけたこぎれいさにクリストフは注意を惹かれた。その服装の心づかいは、他の場合だったら気にも止まらなかったろうが、ここでは快い意外さを与えるのだった。汚れた雰囲気の中にあって、それはあるほほえましい健全なものを持っていた。すぐに彼は、オリヴィエの清い眼に対して前日と同じ感銘を得た。彼は手を差し出した。オリヴィエはおずおずしてロごもった。

「あなたが、あなたがこんなところへ！……」

クリストフは、相手のあらわな気がねのうちに、その愛すべき魂を捕えることばかり考えていて、返事もせずにただほほえんだ。オリヴィエを押しやって中にはいった。寝室と書斎とをかねて一つきりの室だった。鉄の狭い寝台が、窓ぎわの壁に押し寄せてあった。枕木の上に幾つも枕の重ねてあるのが、クリストフの眼にとまった。三つの椅子、黒塗りのテーブル、小さなピアノ、棚の上の書物、などが室を満たしていた。室はごく手狭で、天井が低く、薄暗かった。それでも、主人の眼の清澄な光を反映しているがようだった。すべてがこぎれいできちんと片づいていて、あたかも女の手がはいってるかのようだった。数輪の薔薇の花が壜にさしてあって、古いフロレンス画家の写真で飾られてる四方壁の室に、春の気を少しもたらしていた。

「それじゃあなたが、あなたが私に逢いに来て下すったのですか」とオリヴィエは心こめてくりかえしていた。

「だって、来ざるを得なかったんです」とクリストフは言った。「君の方からは来てくれなかったでしょう」

「そう思っているんですか」とオリヴィエは言った。

それからほとんどすぐに彼はつづけた。

「まったく、そうかも知れません。そう思われるのも無理はありません」

「じゃあ、なぜ来られないんです？」

「あまり行きたいからです」

「なるほど立派な理由だ！」

「本当ですよ、冗談じゃありません。あなたの方はどうでもいいと思っていられるのじゃないかと、心配していました」

「ぼくもそんなふうに気をもんでみたんです。そして君に逢いたくて来たんです。だが、それが君にいやかどうか、ぼくにはすぐに分るんだから」

「もうそんないやみは言わないことにして下さい」

二人はほほえみながら顔を見合った。

オリヴィエは言った。

「昨日は、私は馬鹿でした。あなたの気持を悪くしやすまいかと心配していました。私の臆病なのはまったく病的です。もうなんにも言えなくなるんです」

「そんなことは気にしないがいいです。君の国にはおしゃべりがかなり多いから、時々黙り込む人に、たとい臆病さからでも、言い換えれば心ならずにでも、黙り込む人に出逢うと、うれしいものです」

クリストフは自分の皮肉を面白がって笑っていた。

「では、私が無口だから訪ねて来て下すったのですか」

「ええ、君が無口だから、君が沈黙の徳をそなえてるからです。沈黙にもいろんな種類があるが、ぼくは君の沈黙がすきです。それだけのことです」

「どうしてあなたは私に同情を寄せられるのですか。ろくにお逢いしたこともないのに」

「それはぼくのやり口です。ぼくは人を選ぶのにぐずついてはしない。気に入った人にこの世で出逢うと、すぐに決心して追っかけていって、一緒にならなきゃ承知しないんです」

「追っかけていって思い違いだったことはありませんか」

「幾度もありますよ」

「今度も思い違いではありませんでしょうか」

「それはじきに分ることです」

「ああそうだったら、私はどうしましょう。ほんとに私はぞっとします。あなたから観察されてると思うだけで、私はもう何もできなくなります」

クリストフはやさしい好奇心の念で、その感銘深い顔を眺めた。それは絶えず赤くなったり蒼くなったりしていた。種々の感情が水の上をかすめる雲のように去来していた。

「なんという神経質なかわいい男だろう！」と彼は考えた。「まるで女のようだ」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

彼はやさしくその膝に手をやった。

「ねえ」と彼は言った、「ぼくが警戒しながらやって来たのだと君は思ってるのですか。友人を相手に心理研究をやるようなやつを、ぼくは大嫌いです。互に自由で誠実であって、腹臓なく、うわべをつくろう恥らいもなく、いつまでもうちとけないという懸念もなく、互に言い逆らうことを恐れもしないで、感じたことをすべてうち明け合うという権利――一瞬間後にはもう愛さなくなってもかまわないが、ただ現在は愛してるという権利、それだけがぼくの求めるものです。そうした方が、いっそう男らしく立派ではないですか」

オリヴィエは真実な様子で彼の顔を眺めて答えた。

「それはそうに違いありません。その方が男らしいです。そしてあなたは強者です。しかし私は、なかなかそうはいきません」

「いやぼくは君を強者だと思ってるんです」とクリストフは答えた。「ただ違った意味でです。それにまた、もしよかったらぼくは君を助けて強者にしたいために、やって来たんです。というのは、さっきあれまで言ったからつけ加えて言うんですが、そうでなけりゃこれまでうちとけて言えはしないが、ぼくは――将来はとにかく現在では――君を愛してるんです」

オリヴィエは耳までも赤くなった。きまり悪くてじっとしながら、なんと答えていいか分らなかった。

クリストフは周囲を見廻した。

「ひどい住居ですね。ほかに室はないんですか」

「物置みたいなのが一つあるきりです」

「ああ、息もできない。よくこんなところに住んでいられたものですね」

「馴れてくるんです」

「ぼくならどうしたって馴れやしない」

クリストフはチョッキの胸を開いて、強く息をした。

オリヴィエは窓のところへ行って、すっかり開け放った。

「クラフトさん、あなたは都会にいてはいつも不快に違いありません。が私には、自分の元気を苦しむという憂いはありません。どこへ行っても生きられるほど息が小さいんです。それでもさすがに、夏の夜は苦しいことがあります。夏の夜が来るのを見るとびくびくします。いよいよその時になると、寝台の上に坐っていますが、まるで窒息でもしそうな気がするんです」

クリストフは、寝台の上につみ重なってる枕や、オリヴィエの疲れた顔を眺めた。暗闇の中でもがいてるその姿が眼の前に浮んだ。

「こんなところは出ちまったがいいでしょう」と彼は言った。「どうしていつまでもいるんです?」

オリヴィエは肩をそびやかして、平気な調子で答えた。

「どうせ、どこへ行ったって同じです」

重い靴音が天井の上を歩いていた。階下には金切声が言い争っていた。そして絶えず四方の壁は、街路を通る乗合馬車の響きに揺れていた。

「そしてこれはまたひどい家だ!」とクリストフは言いつづけた。「きたなくて、むれ返って、ひどく貧乏くさい。どうして毎晩こんな家へ帰って来られるんです? がっかりしやしないですか。ぼくだったらとても生きちゃいられない。橋の下にでも寝た方がましだ」

「私も初めのうちは苦しかったんです。あなたと同じようにいやな気がしました。子供の時分には、散歩に連れ出されて、人がうようよしてる汚ない町を通ったばかりでも、胸がつまるような気がしました。口にはいえない変な恐ろしさに襲われました。今もし地震でもあったら、死んだままここにいつまでも放っておかれるだろう、などと考えました。そして、それが世に最も恐ろしい不幸のように思えたものです。そんなところへ自ら好んで住もうとは、そして多分そんなところで死ぬだろうとは、当時夢にも思ってはいませんでした。しかしそう気むずかしいことばかりも言っていられなくなったのです。やはり今でもいやではありますが、もうそんなことは考えないようにしています。階段を上ってくる時には、眼も耳も鼻も、あらゆる官能をふさいでしまって、自分のうちに潜み込んでしまうんです。それから向うに、ごらんなさい、あの屋根の上に、アカシアの木の枝が見えています。そのほかのものはなんにも眼にはいらないように、私はこの隅に坐り込みます。夕方、風があの枝を揺する時には、パリから遠く離れてる気がします。時おりあの歯形の木の葉

がさらさらとそよいでるのを見ると、大きな森が波打ってる景色にもまして、私には楽しく思えます」

「そうだ、ぼくの思ったとおりだ」とクリストフは言った。「君はいつも夢ばかりみてるんですね。しかし悲しいことには、生活の意地悪さと闘ってるうちに、ほかの生活を創造するのに役立つはずの幻想の力は、次第に磨りへらされてゆくでしょう」

「それがたいていの人の運命ではないでしょうか。あなた自身でも、憤りや闘いのうちに自分をむだに費してはいませんか」

「ぼくのはちがう。ぼくはそのために生れた人間だ。この腕や手を見たら分るでしょう。奮闘するのがぼくの健全な生活です。しかし君は、十分の力を持っていない。そんなことはよく分ってる」

オリヴィエは自分の痩せた拳を悲しげに眺めて言った。

「ええ、私は弱いんです。いつもこんなでした。しかし仕方ありません。生活しなければならないんです」

「どうして生活してるんです？」

「出稽古をしています」

「なんの？」

「なんでもです。ラテン語やギリシャ語や歴史の復習をしてやり、大学入学受験者の準備をしてやり、また市立のある学校で道徳の講義をしています」

「なんの講義？」

「道徳です」

「なんて馬鹿なことだろう。君たちの学校じゃ道徳を教えるんですか」

オリヴィエはほほえんだ。

「もちろんです」

「そして十分間以上も話すだけの種がありますか」

「一週に十二時間の講義を受け持っています」

「では悪を行うことでも教えるんですか」

「なぜです？」

「善とはなんであるかを知らせるためには、そんなにしゃべる必要はない」

「というより、知らせないためには、でしょう」

「なるほど、知らせないためには。そして知らなくとも善を行うに少しも差支えはない。善は学問ではなくて、行為だ。道徳を喋々するのは、神経衰弱者ばかりだ。そして道徳のあらゆる条件中第一のものは、神経衰弱でないということだ。世間の衒学者どもは、いわば自分は聾人のくせに人に歩くことを教えようとしている」

「その連中は何もあなたのために語ってるのではありません。あなたは道徳をご存じですが、世には知らない者がたくさんあります」

「そんなら、子供のように、自分で覚えるまで四足ではわせとけばいいんだ。しかし、二本の足でやろうと四足でやろうと、とにかく第一のことは、歩くということだ」

彼はその四五歩にもたらない狭い室を隅から隅へ大股に歩いた。そしてピアノの前に立ち止まり、蓋を開き楽譜をくり拡げ、鍵盤に手を触れて、言った。

「何かひいてくれませんか」

オリヴィエは飛び上った。

「私が！」と彼は言った。「とんでもないことです！」

「ルーサン夫人の言葉によると、君は立派な音楽家だそうです。ねえ、ひいてくれたまえ」

「あなたの前で？」と彼は言った。「それこそ寿命がちぢまってしまいます」

その心から出た率直な叫び声に、クリストフは笑い出し、オリヴィエ自身も多少当惑しながら笑った。

「いったいそんなことが」とクリストフは言った、「フランス人にとっちゃ口実となるんですか」

オリヴィエはなお拒み続けた。

「でもなぜです？　なぜ私にひかせようとなさるんです？」

「それは後で言うから、ひいてくれたまえ」

「何をひくんですか」

「なんでも君の好きなものを」

オリヴィエはため息をもらし、ピアノのところへ行って坐り、自分を選んだ一徹な友の意志に服従して、しばらくぐずついた後に、モーツァルトの美しい口短調アダジオをひきはじめた。初めのうちは、指が震えて鍵を打つ力もなかった。それから次第に元気が出てきた。モーツァルトの言葉をくり返してるだけだと思いながら、知らず識らず自分の心を吐露していた。音楽は慎みのない腹心者である。最もひそかな思想を

も吐露してしまう。モーツァルトの緩徐曲の霊妙な作意の下から、クリストフはモーツァルトのではなく、それをひいてる新しい友の、眼に見えぬ特質を見て取った、神経質な純潔な情深い恥ずかしがりのこの青年の、憂鬱な静穏さを、内気なやさしい微笑を。しかし、その曲の終りに近づいて、切ない恋の楽句が高まって砕ける頂点に達すると、オリヴィエは堪え難い羞恥を感じてひき続けられなくなった。指がきかず音が不足した。彼はピアノから手を離して言った。

「もうひけません……」

うしろに立っていたクリストフは、彼の方へ屈み込んで両腕を貸してやり、中断した楽句をひき終えた。それから言った。

「これで君の魂の音色が分った」

彼はオリヴィエの両手をとり、その顔をまともにしばらく眺めた。そしてやがて言った。

「不思議だなあ！……君には以前逢ったことがある……ぼくはずっと前から君をよく知っていた！」

オリヴィエの唇は震えた。彼はまさに話し出そうとした。しかし口をつぐんだ。

クリストフはなおちょっと彼を見守った。それから黙ってほほえみかけた。そして帰っていった。

＊

彼は輝かしい心で階段を下りていった。二人のごく汚ない小僧が、一人はパンを持ち一人は油壜を持って上ってくるのにすれちがった。彼はその二人の頬べたをなれなれしくつねってやった。顔渋めてる門番にほほえみかけた。街路に出ると、小声で歌いながら歩いた。リュクサンブールの園へはいった。木陰のベンチに身を横たえて眼をつむった。空気は静まり返っていた。散歩の人もあまりなかった。噴水の不同な響きや、時々砂の上の足音などが、ごく弱く聞えていた。クリストフはたえ難いものうさを感じて、日向の蜥蜴みたいにうっとりとしていた。木陰はもうとくに彼の顔から離れていた。しかし彼は思い切って身を動かしかねた。いろいろの考えがぐるぐる廻っていた。が彼はそれをひとつ所に定めようとしなかった。どの考えもみな楽しい光のうちに浸っていた。リュクサンブールの大時計が鳴った。彼はそれに耳を貸さなかった。がすぐその後で、十二時を打ったのだという気がした。彼は飛び上った。二時間もぶらぶらしたのであって、ヘヒトの家での面会時間をも忘れ、朝中むだにしてしまったことを見て取った。自から笑い出して、口笛を吹きながら帰りかけた。商人の呼売の声に基いてカノンのロンドを吹いた。悲しい旋律も彼のうちでは喜びの調子となった。同じ町内の洗濯屋の前を通りかかると、いつものとおり、店の中をじろりと横目で見やった。色艶のない火にほてった赤毛の小娘が、その痩せ細った両腕を肩の近くまで裸にし、胸衣をくつろげて、火熨斗をかけていた。彼女はいつものとおり厚かましい色目を使ってみせた。その眼付が彼の眼に出会っても、彼は初めていらだたなかった。彼はなお笑った。自分の室に戻ったが、いままで気がかりだった事柄も何一つ眼にとまらなかった。帽子や上衣やチョッキを左右に投げ出して、世界を征服するような元気で仕事にかかった。あちらこちらに散らかってる音楽の草稿を取り上げたが心はそこになかった。ただ眼で読んでるばかりだった。数分間たつと、頭がぼんやりして、リュクサンブールの園にいた時と同じく、楽しい夢心地に陥っていった。彼は二三度それに自ら気づいて、はっきり我に返ろうとした。しかし無駄だった。快活に叫び散らし、立ち上って、冷水の盥に頭をつきこんだ。それで少し酔心地からさめた。黙ってぼんやり微笑を浮べながら、テーブルのところに戻って坐った。彼は考えた。

「これと恋愛との間にちがいがあるかしら？」

本能的に彼は、あたかも恥ずかしがってるかのようにそっと考えていた。彼は肩をそびやかした。

「愛するのに二つの仕方はない……いやむしろ二つある。自分の全部を挙げて愛する仕方と自分の皮相な部分のわずかだけを捧げて愛する仕方とだ。おれは後者のようなしみったれた心を持ちたくないものだ！」

それから先は一種の羞恥を覚えて、考えるのを止めた。そして長い間じっと、内心の夢想にほほえみかけていた。彼の心は沈黙のなかに歌っていた。

——君は私のもの。そして今や初めて、私は全く私のもの……。

彼は紙を取って、心が歌ってることを静かに

書きつけた。

*

二人は一緒の部屋に住もうときめた。クリストフは半期分の部屋代を無駄にするのもかまわず、すぐに移り住もうとした。オリヴィエはいっそう細心であって、愛情が少ないのではなかったが、今の部屋代の期限がつきるまで待とうと勧めた。クリストフにはそういう計算が分らなかった。金を持たない連中の多くと同じく、彼は金を失うことをなんとも思わなかった。そしてオリヴィエが自分よりなおいっそう困窮してるのだろうと想像した。ある日彼は、友の窮乏に驚いて、ふいとそのもとを去り、二時間後に、ヘヒトから前借してきた五フランの貨幣を数個、得意げに並べだした。オリヴィエは顔を赤らめて断った。クリストフは不満に思って、中庭で音楽をやってたイタリー人へ、その金を投げ与えようとした。オリヴィエはそれを引き止めた。クリストフは立ち去った。表面は気持を悪くした様子をしていたが、実際では、オリヴィエから断られたのも自分のへまなせいだとして、自分自身に腹が立っていた。ところが友の手紙で、その不機嫌は慰められた。オリヴィエは、彼と知り合いになった喜びや彼が自分のためにしてくれようとした事柄にたいする感激など、すべて声高に言いえなかったことを書いてよこした。クリストフは感情のあふれた狂気じみた返事を出した。十五歳のおり、友のオットーに書いた手紙と似たものだった。情熱と支離滅裂な言葉とに満ちていた。フランス語やドイツ語の駄洒落をまじえていた。その駄洒落に楽譜をつけてまでいた。

二人はついに住居を定めた。モンパルナス町のうちで、ダンフェール広場の近くに、古い家の六階に、台所付三室の住居を見出していた。室はみな狭かったが、四方を大きな壁で囲まれた小さな庭に臨んでいた。二人が住んでる六階からは、ほかよりも少し低い正面の壁越しに、パリになお多く見受けるような、人に知られないで隠れてる修道院の大きな庭を、ずっと見渡すことができた。そのひっそりした庭の小径には人影もなかった。リュクサンブールのそれよりもいっそう高くいっそう茂ってる老木が、日の光を受けてそよいでいた。小鳥の群が囀っていた。夜明け頃から笛のような鶫の鳴き声がし、次には騒々しいリズムの雀の合唱となった。そして夕方になると、夏には、輝かしい空気をつき切って空に滑走する燕の、狂気じみた鋭い叫びが聞えた。夜は、月光の下で、池の水面に立ち昇る泡に似た、蝦蟇の清々しい声がした。もしその古い建物が、あたかも大地が熱に震えてるかのように、重い馬車の響きに絶えず揺られることがなかったら、パリの町であることを忘れてしまえるほどだった。

一つの室が、他の室より広くて美しかった。二人の友は争ってそれを互に譲り合った。籤を引かなければならなかった。籤にすることを考えついたクリストフは、悪い知恵を出して、われながら意外だったほど巧妙に、その室が自分の手に落ちないようにしてしまった。

この時から、二人にとって全く幸福な時期が始まった。その幸福は、ある一定の事柄のうちにあるのではなくて、すべての事柄のうちに同時に存在していた。二人のあらゆる行為と思想とを浸し、一瞬も二人から離れなかった。

二人の友情の新婚期ともいうべき時期の間、

世界の中に一の魂を自分のものと呼びうる人……

のみが知っている、無言の深い喜悦に満ちた最初の時期の間、二人はほとんど口をきかなかった。ほとんど口をききえなかった。互に傍にいることを感じたり、長い沈黙の後に二人の考えが同じ方向をたどってることを示すような、一つの眼付や言葉を交じえたりするだけで、彼らには十分だった。互に何ひとつ尋ねかけもせず、互に顔を見合わすこともしないで、二人は絶えず互に見守っていた。愛する者は知らず識らずに、愛の相手の魂にのっとるものである。相手の気持を害せず相手の全部でありたいという、ごく強い欲望を持ってるので、不思議な急速な直覚力によって、相手の奥底のきわめてかすかな動きをも、すべて読み取ってしまう。お互に透き通って見える。彼らは互にその存在を取り換え合う。顔立ちは互に真似し合い、魂は互に真似し合う――奥深い力が、種属という悪魔が、とつぜん躍り出してきて、自分を縛めている愛情の外皮を引き裂いてしまう、その日までは。

クリストフは小声で話し、静かに歩き、沈黙がちなオリヴィエの室の隣室で、音を立てまいと用心していた。彼は友情のために様子が変っていた。かつて見られなかったほどの、幸福と信頼と若さとの表情をしていた。彼はオリヴィエを敬愛していた。オリヴィエは、それを身にあまる幸福だと恥ずかしく思わなかったら、自分の力を濫用して勝手な真似をするのは容易だったろう。が彼はクリストフよりずっと劣ってると自分をみなしていた。クリストフも同様にみずから卑下していた。そしてこの相互の謙譲は、彼らの大きな愛情から来たものであって、さらに一つの楽しみだった。友の心のうちに多大の場所を占めてると感ずることは――それが身にあまることだと意識してもなお――非常に嬉しいことだった。そして二人は互に、しみじみとした感謝の念を覚えていた。

オリヴィエは自分の書物をクリストフのと一緒にしておいた。もうその間の区別を立てなかった。ある本のことを話す時には、「ぼくの本」と言わないで、「ぼくたちの本」と言った。そして彼が共同の財産中にまじえないで別にしておいた品物は、ごくわずかな数しかなかった。それはみな、姉の所持品だったものか、あるいは姉の思い出を帯びてるものだった。クリストフは愛情から来る敏感さで、間もなくそれに気がついた。しかしその理由は知らなかった。彼はかつてオリヴィエにその両親のことなどを尋ねなかった。もう両親がないことだけを知っていた。そして、愛情の上での多少高ぶった控え目から、友の秘密を探り出すことを避けた上に、過去の悲しみを友の心に呼び覚ますことを恐れる懸念もあった。友の身の上を非常に知りたくはあったけれど、ある妙な気おくれから、オリヴィエのテーブルの上にある写真を目近く見調べることさえ、なしえないでいた。写真に現われてるのは、威儀を正した紳士と貴婦人と、それから、足もとにスパニエル種の大きな犬を置いた十二三歳の少女とであった。

一緒に住んでから二三か月後に、オリヴィエは悪寒を覚えた。床につかなければならなかった。クリストフは慈母めいた心持を起して、気づかわしい情愛で看護をした。医者はオリヴィエを聴診して、肺尖に少し炎症を発見し、患者の背中にヨードチンキの塗布をクリストフへ頼んだ。クリストフはその役目を真面目くさってやってのけたが、その時、オリヴィエの首に聖牌がかかってるのを見出した。彼は今ではもうオリヴィエを十分理解していて、オリヴィエが彼よりもいっそう宗教心から離脱してることを、よく知っていた。それで聖牌を見出した驚きを隠しきれなかった。オリヴィエは顔を赤めた、そして言った。

「これは記念の品なんだ。憐れなアントアネットが、死ぬ時につけてたものだよ」

クリストフははっとした。アントアネットという名前は彼にとっては電光に等しかった。

「アントアネットだって？」と彼は言った。

「ぼくの姉だよ」とオリヴィエは言った。

クリストフはくりかえした。

「アントアネット……アントアネット・ジャンナン……それが君の姉さんなのか？……だが」彼はテーブルの上の写真を眺めながら言った、「子供の時に亡くなったんじゃないのか？」

オリヴィエは悲しげにほほえんだ。

「それは子供の時の写真だよ」と彼は言った。「ほかに写真がないものだから……。亡くなったのは二十五の時だった」

「ええ！」とクリストフは感動して言った。「そしてドイツにいたことがあるんだろう？」

オリヴィエはそうだと頭でうなずいた。

クリストフはオリヴィエの両手をとった。

「ぼくは君の姉さんを知ってたんだ！」と彼は言った。

「ぼくもそのことは知ってる」とオリヴィエは言った。

彼はクリストフの首に飛びついた。

「かわいそうに、かわいそうに！」とクリストフはくり返した。

彼らは二人とも涙を流した。

クリストフはオリヴィエが病気であることを思い出した。その心を落ち着かせようとし、無理に腕を蒲団の中に入れさせ、肩の上に毛布をかけてやり、そしてやさしく眼を拭いてやり、その枕頭に坐った。それからじっと顔を眺めた。

「だから」と彼は言った、「ぼくは君を知ってたのだ。初めて逢った晩から君に見覚えがあった」

（彼が話しかけてるのは、そこにいる友へかあるいはもう世にない彼女へか、どちらとも分ら

なかった）

「だが君は」と彼がやがて続けた、「それを知ってたんじゃないか。……なぜそう言わなかったんだい？」

オリヴィエの眼をかりてアントアネットが答えた。

「私には言えませんでした。あなたの方で察して下さるはずでした」

二人はしばらく黙っていた。それから夜の静けさのなかで、オリヴィエはじっと床に横たわりながら低い声で、手をとってくれてるクリストフへ、アントアネットの話をした。しかし、言ってならないこと、彼女が包み隠していた秘密――彼が告げるまでもなくクリストフは多分それを知っていたろうが――それだけは、口に出さなかった。

*

それ以来、アントアネットの魂が二人を包みこんでしまった。二人一緒にいる時には、彼女もともにいた。二人は彼女のことを考える必要がなかった。二人一緒に考えることはみな、彼女のなかで考えていた。彼女の恋は、二人の心が一つに結ばれ合う場所であった。

オリヴィエはしばしば彼女の面影を描き出した。切れぎれの思い出や短い逸話などを思い起した。すると彼女の内気らしいしとやかな身振りや、落ち着いた若々しい微笑や、衰えた身体つきのもの思わしげな優雅さなどが、ぱっと明るくなって現われた。クリストフの方は、耳を傾け口をつぐんで、眼に見えないなつかしい彼女の映光に浸った。誰よりもよく生命の気をむさぼり飲む天性にしたがって、彼は時とするとオリヴィエの言葉のうちに、オリヴィエにも聞えない深い共鳴音を聞き取った。そして彼はオリヴィエ自身よりもなおよく、亡き若人の存在を自分に同化していた。

本能的に彼は、オリヴィエの傍で彼女の代りを務めた。不器用なドイツ人たる彼が、アントアネットと同じ微細な注意や世話を、みずから知らずにやってのけてることは、見るも心惹かるる光景だった。彼は時々、アントアネットのうちにオリヴィエを愛してるのか、オリヴィエのうちにアントアネットを愛してるのか、もはや自分でも分らないことがあった。愛情の発作に駆られては、黙ってアントアネットの墓詣りに出かけた。そして花を持っていった。オリヴィエはそれに長く気づかなかった。ある日墓の上にごく新しい花を見出して、ようやくそれと知った。しかしクリストフが来たのだという証拠を得るには、容易なことではなかった。おずおず言い出してみると、クリストフは不機嫌な乱暴さで話をそらした。彼はオリヴィエに知られたくなかった。そして執拗に隠しぬいた。がある日ついに、イヴリーの墓地で二人は出合ってしまった。

オリヴィエの方ではまた、クリストフに内密で彼の母へ手紙を書いていた。ルイザへ息子の消息を伝えてやった。自分がいかほど彼を愛し敬服してるかを、書きおくった。ルイザもオリヴィエへ、下手なつつましい返事を書いて、感謝の念にくれていた。彼女はまだやはり息子のことを小さな子供のように語っていた。

*

愛に満ちたなかば沈黙の時期――「何故ともなく歓ばしい楽しい静安」――の後に、二人の舌はほどけてきた。友の魂の中に発見の航海をすることでいく時間もすごした。

二人は互にずいぶん異なってはいたが、どちらも純粋な地金で出来上っていた。そして同じものでありながらも異なっているゆえに、なお愛し合った。

オリヴィエは弱々しくて、困難と戦うことができなかった。一つの障害にぶつかると、すぐに辟易した。それも恐ろしいからではなくて、多少は臆病なからであり、多くは、征服のために取らなければならない荒々しい粗暴な方法を忌み嫌うからであった。彼の生活の方便は、出稽古をしたり、例によって恥ずかしいほどの報酬で、芸術の著書をしたり、またまれには雑誌の原稿を書いたりすることだった。その原稿も決して自由なものではなく、ごく興味の薄い題目に関するものだった。――彼が興味を持ってる事柄は喜ばれなかった。彼の最も得意なものはかつて求められなかった。詩人であるのに評論を求められた。音楽に通じてるのに絵画論を喜ばれた。そんなことについてはくだらないことをきり言えないのは、自分でもよく分っていた。しかしそれがちょうど人に好かれる事柄だった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com